[redacted]

下賀茂の森

美知代

夏ならば涼しい青葉蔭に時鳥來鳴く下賀茂の社頭も、秋を迎えて全然り趣を變へた。殊に京都の氣候と云つたら昨日漸く冷風が立初めたかと思ふ間に、今朝は最早綿入れ羽織が欲しくなると云つた有樣で。

二三日續けて降つた霜の爲めに木の葉のあらかたは散失せて、僅に一縷の命を枝頭につないだ紅葉すら程も無う根に復へる哀れさを見せて、馬場一面の芝原は處々に灰を撒いたかのやう、本殿へ通ふ並木道との間を流れた小川には痩せた清水が、微かな力無い聲で物寂し氣な歌を歌ひ乍ら落葉の上下をぬけて行く、其並木道にも秋は宿つて。つい此頃迄繁つて居た檻公孫樹名も知らぬ雜種の大木は骨露はに幹を延べて、血の氣の失せたやうな小枝には翼寒むそうに小鳥が鳴いて居る、日の光も何とは無う曇合とほの白く、遙かに朱い鳥居が見えるのすら、此樣な景色の對照から却て一種の寂淋を增す計り、一歩を此裡に入れると自ら神寂びた念が湧いて、やがて涙もあふれるのである、がそれは恐らく自分一人ではあるまい。

自分は此頃日課のやうに夕餉を濟ますが早いか、愛誦の詩集を懷に、毎日々々此邊りを散歩くのので、否これは此頃初めたのではない、抑自分が二年前都合あつて京都へ轉住つて以來、少々の雨風には頓着無く旅行と病氣と止むを得ない時を

除けては、必ず此自然に接して苦しい煩悶も訴へれば、儚い運命を泣きもして、且つ又尠なからぬ慰藉と力とを受けたので、實際下賀茂の森は自分に取つて唯一の隱れ家でありはた又生命の安息所とでも云はうか、父は死んだ母も亡つた、兄もなければ妹も無い、ほんに人として淋しい身ではあるが、只此自然の懷計りは自分の爲めに溫い。——いつものやうにこんな事を考へながら歩くともなく歩いて、何時しか自分は長い並木道を通り拔け、朱い鳥居をくゞつて、宮殿へは寄らず音に名高いたゝすの森へと這入つて、上面の黃勝つた落葉をふんで、恍惚音に聞き、音が止めば又歩み、參差亭々快よく聳え立つた公孫樹の木蔭を逍遙ふた。

歩み勞れ音にも飽いたので、遂に落葉をかき集め、靜かに其上に座つた、勿論種々の空想を自由な憧憬に載せて、而して其空想の翼が遂には雙羽をひろげて此森一ぱいと成り、更に大きくなつて果ては世界の上を翔け廻つて居るかのやう、我を忘れて幾時かを興に入つて居た。やがて輕う肩を叩くものゝ氣に心附くと、更に黃金葉一つ落ち散つて、憚つたやうな歎獻の聲がすぐ脊後から聞えたので、宛ら撥き出されでもしたやうに自分は一切の現實に復つたのである。只見ると彼方に悄然と坐つて居るものがある、後姿計りて顏は解らぬが、二十四五でもあらうか、痩形のすらりとした體に栗梅勝つた縞お召の道行を着て、白茶色の肩掛をかけ、髮は品の好いエス卷、六歲ばかりの女の子に寄添ふて俯いた襟足の美しさ。

『泣くの嫌よう』

長いまつげに露を宿して、少女は凝然と見上げた儘傍眼もふらぬ、見れば今にも泣き出し相な樣子で、可愛い口元がぴりゝ、痙攣る……

『よう母ちやん!』

『あら、泣きやしませんよ』と周章て云つて强て涙を飲み込み、暫くして『でも美佐ちやんと逢つて餘り嬉れしかつたもんだから、つい……』

『左樣よ妾いだつて泣いちやつてよ』

『何故? 母ちやんお嫌?』

『好きよ、大好きよ、だつても母ちやんだつて……』

『オホ…… 妾も美佐ちやんが一等可愛い』

『うそよ、うそだわ』

『何故?』

『だつても皆なが母ちやんはお前を可愛くないのだらうつて云ふわ』

『……』

『だけども妾い如何しても母ちやんを嫌ひになれないのよ』と可懷しげに傍にすり寄つて『ねえ母ちやん後生だから妾いと一所にお家へ行きませうよう』

『否、今日は駄目なの……而してお祖母さんはお達者ですか』

『あら、彼んな事云つて、屹度又何處かへ去つちやうのよ』

『けどもね美佐ちやん』と云つたが耐らなくなつて、又泌々泣くのであつた。

『母ちやんだつて、それはお前を手放し度かないけども、左樣云ふ譯に行かないの、お前はまだ年が行かないから何もお

知りでないが、今に成人くなつたらすつかりお解りです、小供心に不人情な母だと恨んでもおいてだらう、けども、けども……否もう〳〵母ちやんの事なんか忘れて、一生懸命お祖母さんを大切に、父様の申付けを何でもハイ、〻つて聞くんですよ』

『嫌よ々々、父様嫌よ』

『何でせうぬえ美佐ちやんは』

と酷しく云つたが、つと引寄せて抱きメめた儘、さも〳〵可愛ゆくて堪らぬと云つた様子に、幾度となく頬摺りしてはは〳〵と涙を流すので、美佐子もつい悲しくなつて泣き出した。

『お前は本當に可哀相だよ、兩親立派に揃つて在りながら……勘忍して頂戴、てもお祖母様がよく面倒を見て被下るつて云ふから……さあ〳〵餘り遲くなるといけません歸りませう』

『じや母ちやんは如何してもお家へ行かないの』

『あゝ左樣ですよ、けどもお祖母さんにも誰にも母ちやんに逢つたとは云はなきや、もう一度つきり此處で明日逢えるかも知れない』

『何故云つちや惡いの、お祖母さんも屹度逢ひ度がるわ』

『何と云ふ無邪氣だらう、あゝ一寸お前此方へお寄りな、此お袖は何でせう、すつかりとれるじやないかね』と云ひながら荒い矢飛白の被布のほころびを結んで『矢張り何と云つても行屆かないのねえ』

『あら、あら家の初やだよ、初やあ、お前何處へ行くの』

ばた〳〵と人の駈け寄る足音に、母はあなやと驚ろいて、つと闇の中に身をさけた。

『お嬢樣、あなたはまあ何故お一人でこんな處に被居いましたの、早くお歸りなさいませんと、お祖母樣は大變に御立腹で御座いますよ』

『だつても妾い……』

『そんな事を仰有ると初やはお祖母樣に云つけて御飯を差上げませんから、さあ早くおんぶ遊ばせ』

『嫌だ々々』

けれ共下女は無理に引立てゝ歸るので。自分は何かの力に壓せられた心地に、胸が引きしまつて化石のやうに固くなつた。

『美佐ちやん堪忍してお呉れよ』

激しい歔欷の間から押し出す聲の途切れ〳〵繰り返へす憐れさ、見る〳〵四邊りは急に闇を成したが、またそれが分れて、やがて二十日餘りの幽かな月影は此年ふるい森の中の濕つた空氣を破つて、觸れば霜になりそうな光を投げ掛けた、女の顏は誠に死人のそれで、而して其頰には玉なす涙がしとどに流れて居る。

風が吹いて木の葉が舞ふと、名も知らぬ鳥のけたゝましい聲が、つい傍の梢から起つた。

自分は其儘歸つたが、哀れと感じた母子の俤は中々忘れられないで、今でも何うかすると何故の離別だらう等と、人事ならず胸を痛めるのである……

（完）

[redacted]